

◆頭塔下古墳の調査—第277次

1 はじめに

頭塔調査の過程で東面基壇の下層に横穴式石室をもった古墳が存在することがあきらかになり、頭塔と合わせて調査をおこなった。古墳は墳丘・石室共に上半部が破壊され、その上に頭塔の築土が積まれている。抜き取った石室の石材を頭塔に再利用した可能性もある。調査は石室を中心におこない、墳丘の観察はトレンチや石室北側の第二次大戦中の防空壕壁面でおこなった。

2 墳丘と石室

墳丘 墳丘は頭塔と重複し、頭塔の石積や石敷の下に及ぶため墳形や外部施設は確認できなかった。土層断面からは、ほぼ水平に均等な厚さで版築がおこなわれている頭塔と、不規則に土が墳丘に傾斜をもって積まれている古墳の墳丘の差異を明瞭に捉えられる。

横穴式石室 (図45)

石室の状況 西に袖がつく片袖式の横穴式石室である。南方向に開口する。攪乱により開口部は破壊され、残存長は5.2mである。羨道西側壁は上部に下層頭塔のI期石敷が良好に残存するため検出していない。

石室内には頭塔構築土が充満していたが、床面付近には頭塔築造時までに石室に流入したと考えられる暗褐色土が厚さ20~30cmで堆積していた。したがって床面上の副葬品は、頭塔構築時には大きく攪乱されていないと考えられる。

玄室 全長3.05m、最大幅1.5m、残存高0.77m。側壁は最高3段が残存する。袖石には大型の石1個を用いて、羨道西壁と面をそろえる。両側壁とも若干内傾してたちあがる。奥壁最下段は2石を並べていたと考えられるが、西側の2段のみ残存する。床面は石室構築後、張床を施し、円礫を敷き詰めている。礫敷の施工過程は明瞭ではないが、石室中央から奥壁にかけて大きめの礫を敷く傾

向が観察できる。玄室西北隅で棺台の可能性のある石2個が、東西に並んで出土している。

羨道 残存長2.15m、最大幅0.87m、残存高0.41mを測る。床面に礫敷はなく、土床である。また、閉塞施設については調査区内では確認されなかった。

遺物出土状況

遺物に馬具・武器・装身具・土器などがあり、多くが礫敷直上で出土した。馬具の鉄製環状鏡板付轡・辻金具・鉸具が奥壁付近でまとまって出土し、同じ面繫の部品と考えられる。鉄刀は西壁沿いで、鉄鏃は奥壁付近と玄門付近で、紡錘車・耳環は玄室中央部で出土した。ガラス小玉は西北部に集中して出土し、多くは床面の礫の間に落ち込んで出土している。土器は西南隅で提瓶、長頸壺が、残りは中央から奥壁付近で出土している。

追葬は、棺台の可能性のある石が轡の上部にあったこと、奥壁の土器が割れて重なり合っている状況から、短期間に行われた可能性もあるが、出土状況や遺物からは積極的に肯定し難い。(金田明大/考古第2)

3 石室内出土遺物

金属製品、石製品などを図46に示す。

馬具

鉄製環状鏡板付轡(1) ほぼ完形である。鏡板は、鉄棒を曲げ扁円形に鍛接し、更に小型の矩形立聞を鍛接して作る。立聞には9連の兵庫鎖を装着する。銜は2連。引手は、銜とは別に鏡板に直接連結する。引手の端部はくの字に屈曲する。鏡板径9×8.6cm、引手長16.2cm。

辻金具(2・3) 同形品が3個体分ある。脚は十字状に4個所に付く。脚の端部は三角形を呈し、中央の円頭鉤と基部の責金具で革帯を留める。責金具に綾杉状の刻みが入る。鉢は比較的扁平な半球状で稜はない。鉢の頂部に花形の座金具を置いて、円頭の鉤で留める。座金具には均等に4~5個所に穿孔する。鉢部復元径6.1cm、鉢部高

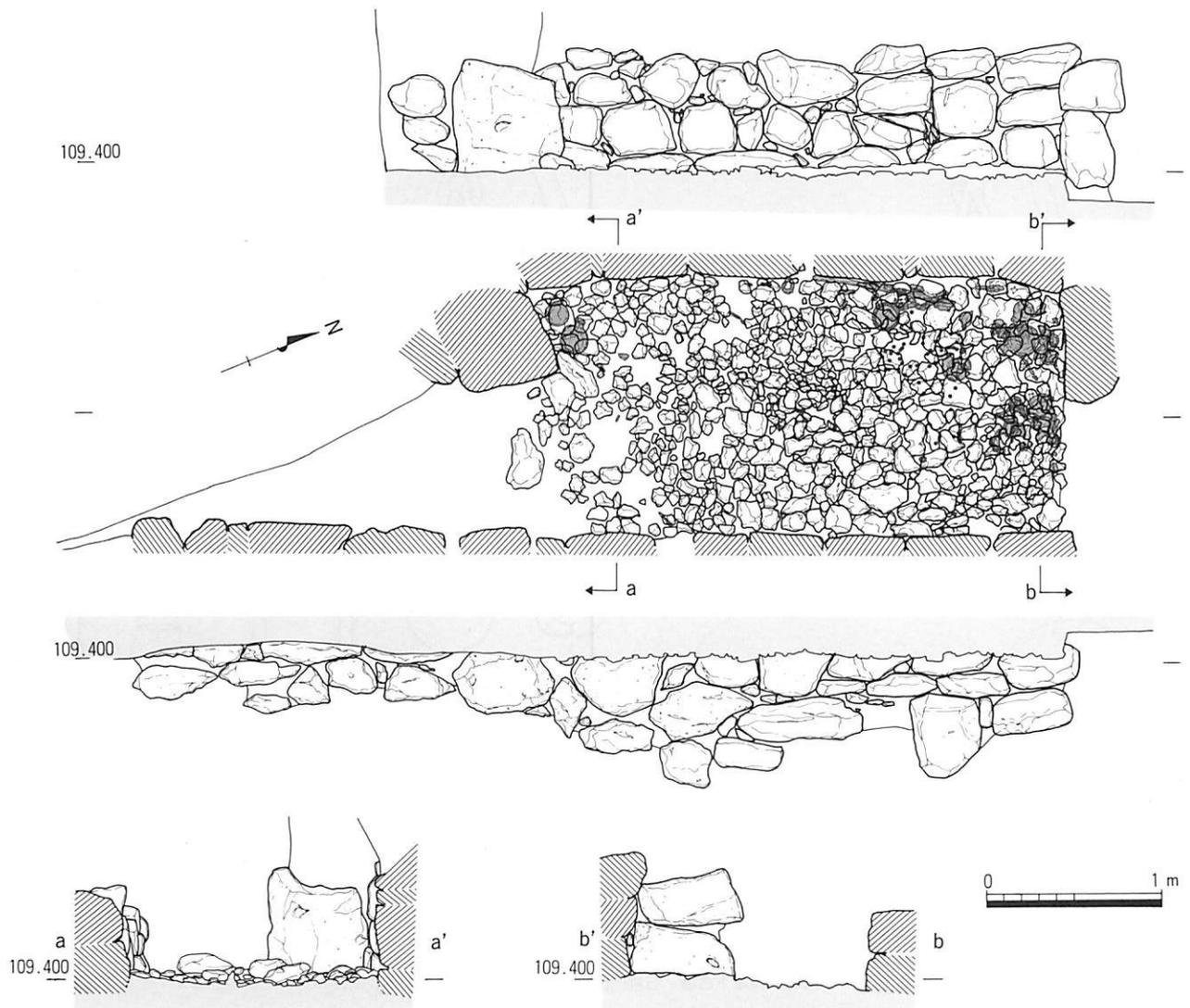


図45 頭塔下古墳石室 1:40

2.1cm。脚長1.8cm、脚幅2.0cm。座金具径2.0cm。

鉸具 (4・5) 同形品が2点ある。鉄棒を曲げて鍛接し、基部に短い鉄棒を巻き付け刺金とする。長6.1cm、幅4.0cm。長4.8cm、幅3.9cm。

武器

鉄刀 (6) 西側壁に接して鋒を奥壁側に向けて出土した。茎が関付近で折れているが、出土状況からみて、全長約84cmに復原できる。錆ぶくれ・破損のため正確な量は不明であるが、平背平造で比較的深い刃関と細い茎をもつ片関の鉄刀と考えられる。

鉄鐔 (7) 板状の倒卵形鐔。鉄刀と近接して出土し、本来鉄刀に装着されていたと思われる。径7.6×6.4cm。

鉄鏃 (8・9・10) 20点ある。全て長頸鏃であるが形式がわかるのは5点のみである。8は長頸三角式。台形関をもつ。同形品は1点ある。現存長12.7cm。9は長頸片刃式。台形関をもつ。同形品は1点ある。現存長13.0cm。10は有頸三角式、棘状関をもつ。現存長10.2cm。

装身具

耳環 (11・12) 銅地銀張りの耳環が2点ある。出土位置は離れている。銅の錆化が激しく、部分的に銀がはげるとはほぼ同寸で。径3.2×1.9cm。

ガラス玉 径3～5mmの薄青色のガラス小玉が71点、径約7mmの濃青色のガラス丸玉が1点ある。

その他

石製紡錘車 (13) 全体は截頭円錐状を呈し、底部付近は約7mm直立し、稜をつくる。中央に頂部から径約7mmの穿孔を施す。上面は良く研磨されているが、直立する側面は荒い擦痕が残る。底面には放射状の線刻を施す。蛇紋岩製。径3.8cm、高さ1.6cm。

この他に鉄釘片14点、刀子片1点がある。

以上の金属製品の年代を考察しておく。轡の小型矩形立聞と長連の兵庫鎖は、須恵器編年では、主としてTK10型式期に盛行し、TK43型式期頃まで継続した。辻金具では無稜の鉢はTK23型式期からMT85型式期にかけて徐々にふくらみが強くなる傾向があり、本例はその最終

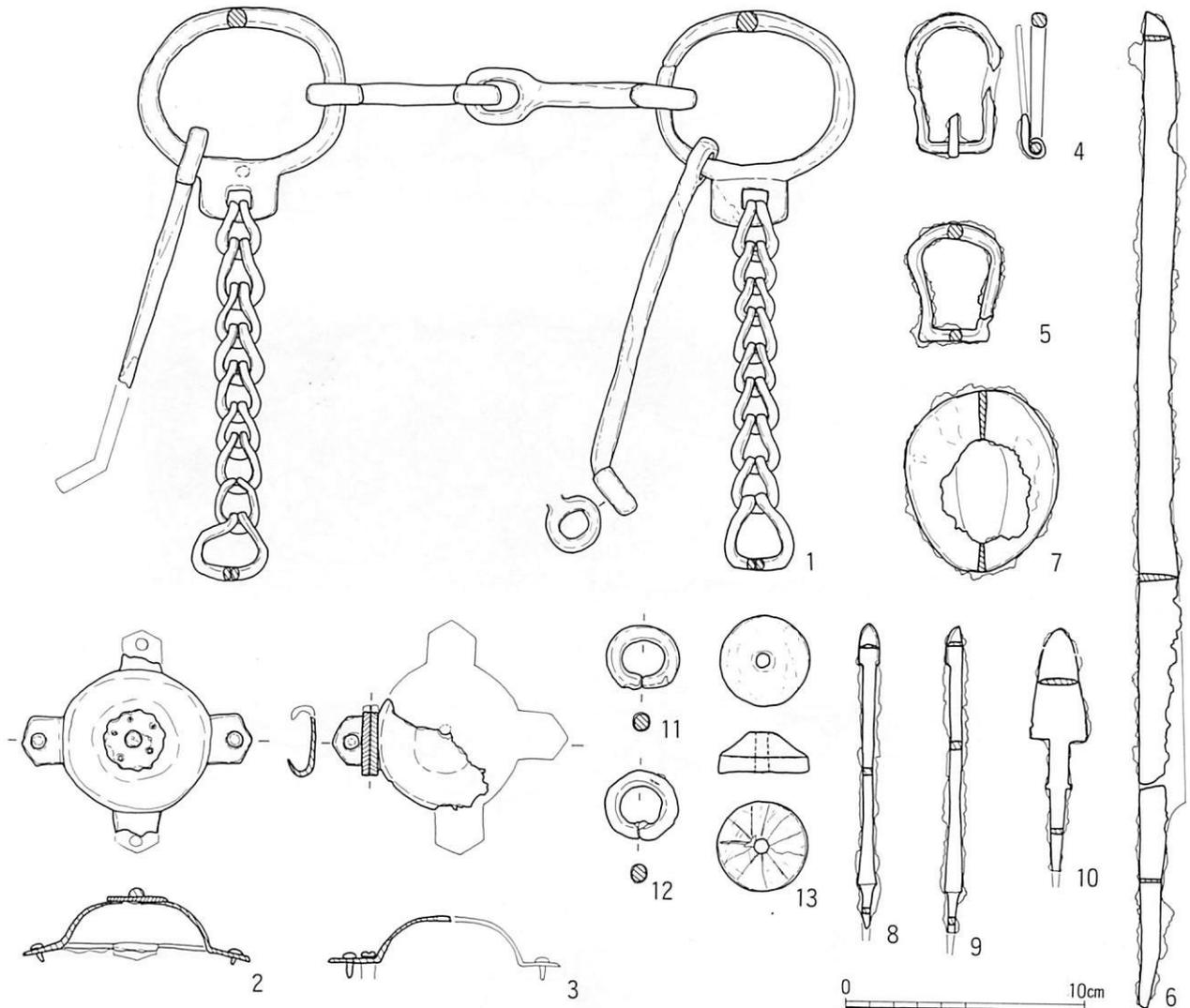


図46 頭塔下古墳 石室内出土遺物 1:3 (6のみ1:6)

段階になると思われる。綾杉状の刻みを持つ黄金具はMT85~TK43型式期に限定される。先端が三角形になる脚はTK43型式に多い¹⁾。鉄刀の形状は、MT15~TK209型式期にかけてみられるものだが、倒卵形鐙はTK43型式期に出現する。また、鉄鏃の棘状関もTK43型式期に出現する。以上から馬具がMT85~TK43型式期、武器はTK43型式期という年代が想定できる。若干、馬具に古い様相がみられるが、特に追葬を想定するほどの時期差ではない。全体としては、TK43型式期の古い段階を想定するのが妥当であろう。(臼杵 勲/考古第1)

土器

石室より須恵器16点、土師器2点が出土した(図47)。

須恵器

杯蓋(1~3) いずれも沈線によって稜を表している。天井部はヘラケズリを施す。

杯(4~10) 立ち上がりの高さは器高の1/4程度であり、底部はヘラケズリを施す。

無蓋高杯(11) 脚部に3方向、2段の透かし孔をもつ。

台付長頸壺(12) やや内湾する口縁部と、肩の張った胴部をもつ。胴部は肩部より下半にカキメを施し、施文後

中央部に斜方向の沈線を施す。脚部は欠失しているが胴部より連続するカキメをもち、3方向の透かし孔をもつ。
長頸壺(13) 口縁部~頸部が残存。ヘラ状工具による2条1単位の沈線を頸部に3条めぐらし、間にヘラ状工具による波状文を施す。

提瓶(14・15) 14は外反する口縁部をもち、胴部前面に同心円状のカキメを施している。15はやや小型なものである。口縁部は内湾し、胴部はナデ及び回転ケズリを施している。共に肩部に鉤状の把手をもつ。

長頸壺(16) フラスコ形長頸壺と称されるものである。胴部はヘラ状工具による沈線を同心円状に施し、側面にはタタキの痕跡を残している。前面観が円形で側面観がやや扁平な胴部の形態、胴部成形後側面に口縁部を取り付け、前面に円形粘土板をはりつける製作技法は提瓶と類似する。一部に緑色の自然釉がかかる。これらの特徴から東海地方の製品であると考えられる。

土師器

高杯(17) 口縁部は小片であるが、端部がやや内部に屈曲するものである。脚部は短く八の字状を呈する。

長頸壺(18) 長い口頸部と球形の胴部をもつ。胴部上半

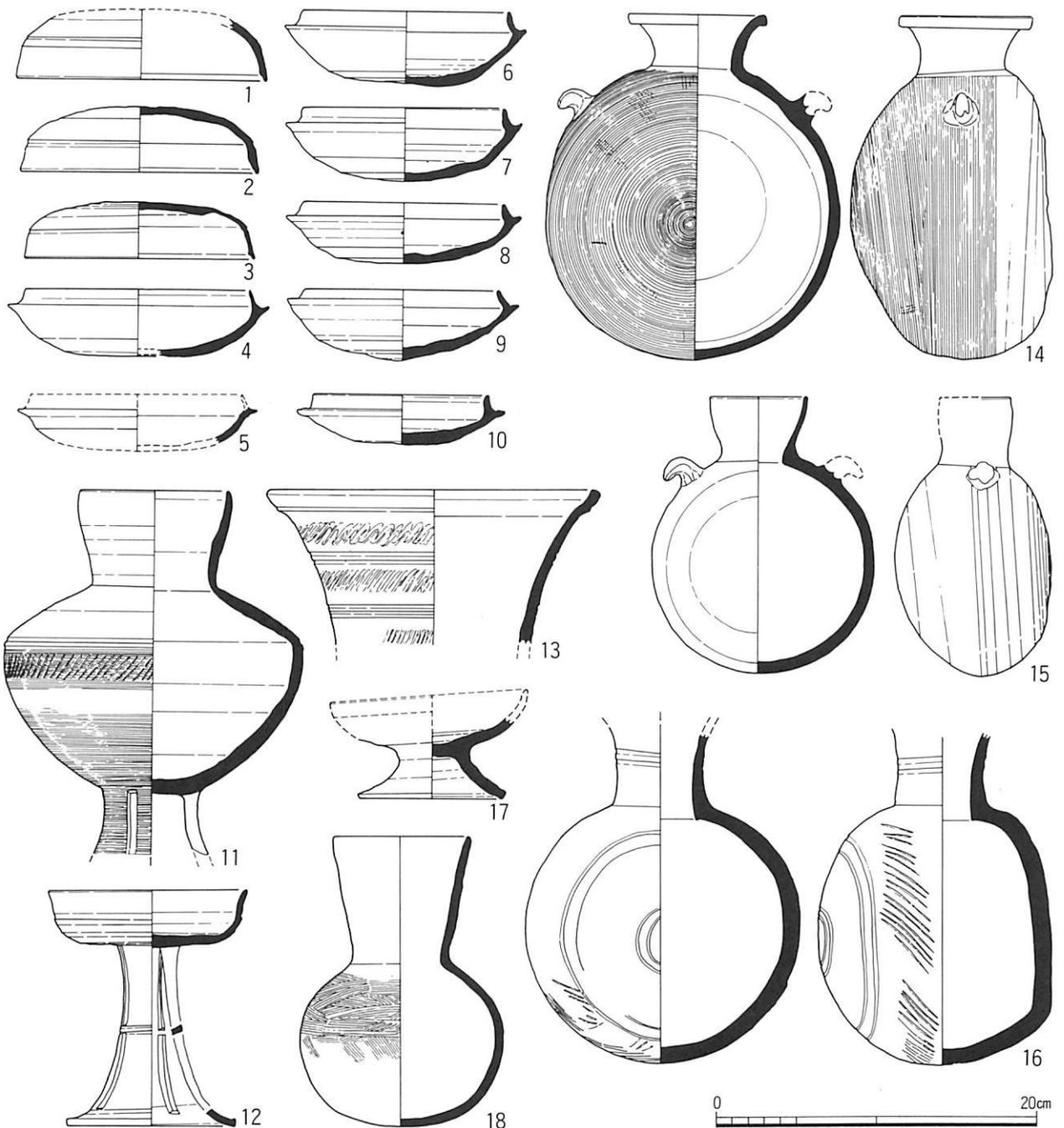


図47 頭塔下古墳 石室内出土土器 1:4

にはハケメが施される。

これらは須恵器から判断して田辺昭三氏の陶邑編年TK10（後半）～TK43型式の時期に相当すると考えられる。型式的にも、出土状況からも全て同時に副葬されたものであると考えることができよう。

4 おわりに

正倉院文書の中の造南寺所解には、東大寺の南を削平した際に墓が破壊され、その霊の供養に用いる仏頂經の書写の費用が請求されている²⁾。このように頭塔周辺は、平城京遷都から近年の市街地化にいたる度重なる開発によって多くの古墳が破壊されたと考えられ、現状の希薄な古墳の分布状態が実態を示すものとはいいがたい。現

存する近隣の当該期の古墳としては東北方350m離れた春日野に御料園古墳群が存在するが、これは春日大社の社地内という条件により残存したものと考えられる。

今回の頭塔下層における古墳の発見は、周辺の尾根に群集墳が存在した可能性を大きくするとともに、古墳時代における造墓活動の様相の解明に重要な情報を提供したといえよう。
(金田明大)

註

- 1) 馬具全般について宮代栄一氏からご教示いただいた。
- 2) 福山敏男「頭塔の造立年代に就いて」『考古学雑誌』22-6 1931